

## 憂いをこえて

古村伸宏

日本労協連  
事務局長

新しい世紀・21世紀も3年目を迎えた。今なお繰り返されるイラクでの出来事と、世界中で進行する数多の惨事を前に、希望や期待が疎み、怒りや恐怖、そして憂いが体を駆け巡る。新しい世紀にかけた願いは、このまま風前の灯と化するのだろうか。

翻って「平和ボケ」といわれたこの国も、未来を巡る葛藤の中にある。自衛隊が海外へと出かけ、戦時に加わる事態も葛藤の表れなのか。こんな事態に生きる一人の人間として、無力さとともに、諦めは許されないと自らを鼓舞する自分に奮い立つ。40年の人生が試されているように感じる。

「西暦2000年における協同組合」。レイドローが訴えた警鐘が鳴り響く。21世紀を「人間の絆」が再生する世紀にしていくところ、青臭いようだが全ての出発点のような気がする。その役割を担わない協同組合は、もはや「協同」を語る資格がない、と言い切れる時代の切迫感が、私にはある。「人間の絆」とは何なのか？その力を疑う前に、追い求める勇気と実践こそが、協同組合の最も誇るべきアイデンティティだ。

ILOが発した協同組合の促進勧告は、「人間」と「労働」を結び、社会を切り拓く力を協同＝絆に見出したものだと理解できる。人間は労働を通して社会的な存在になる。その労働が蔑ろにされ、危機が広がる中で、両者がもう一度立ち返る機軸を、「絆」に求めているのではないか。そしてその絆こそが、人間と労働をディーセントなものとして育て、ひいては社会を「結びつき」で溢れるものへと導く原動力として位置づけるものだと考える。

この国における「労働の危機」が叫ばれて久しい。その陰は今や全世代を覆っている。とりわけ、未来を担う若者にとって、「仕事がない」「仕事に価値が見出せない」ことは、言葉では言い尽くせない危機だ。社会の危機を超え、人間という存在そのものの危機といえる。今、この危機に立ち向かう力は存在しているだろうか。「誰か」ではなく「誰も」がこの危機に立ち向かう何かをはじめなければ、残念な結果が訪れるかもしれない。しかも予想を越える速さで、だ。私の思いは、つい最近までの「若者当事者」「若者OB」という

意識が覆され、社会や時代、生活の当事者として、若者と仕事の問題を捉えている。

今私が力を入れ取り組んでいるのは、千葉大学を舞台に、行政・学校・協同組合・市民・そして学生や若者当事者たちが、真正面から上記の危機を共有し、それぞれが主体者・当事者となり、「仕事おこし(講座)」を全く新しい発想・内容・そして実践で生み出す取り組みだ。幸い、この取り組みを進めるキャストはどんどん広がっている。その中核を担うワーカーズコープの理念・原則・実践が試される取り組みでもある。この取り組みを訴える自分が、時には気負いすぎて持て余す事も多々ある。しかし、今必要なことは見てくれよりも人間の五感全てに訴えることだと感じる。特に「熱」のようなものがないと心がつながっていかない。つまり絆が生まれないとも感じている。その意味では、自分の「人間力」が試されているのかもしれない。幸い、この熱を感じてくれる人々に、様々な分野で出会っていることで、自分の「人間力」も増したように感じる。ともあれ、今月末には一つの形に仕上がるだろう。その時、熱を持ってみなさんにも伝え広げようようにしたい。

若者が仕事につくことを支援し、一緒に実現することは、新しい絆の芽となるだろう。そこには、今の社会が背負っているもう一つの病である「世代間」の絆を紡ぎ直すことになるかもしれない。それ以上に、働くことのおもしろさや充実感を育てることが、もっとも必要となっていることだと思う。「食・農」「環境・リサイクル」「子育て支援」をコミュニティ・ビジネスとして、協同労働で仕事おこしする実践……。夢が現実へと近づこうとしている。

憂いは、人を殺ぎ落とした時に感じる。人を取り戻せば、優しさが生まれる。学校という未知なる「社会」へと我が子を送り出す今、そのことを痛切に感じる。社会を見渡し、地域を見つめるほどに胸が痛む。同時に、決して一人ではないんだ、ということをお子に語る自分を、もっともっと強くしたいと思う。「優しく」「思慮深く」「粘り強く」「柔軟に」。生活と仕事の一体感と共に、決して後戻りや後悔できない「責任」を感じる。人を育て、人に育てられ、憂いをこえ、しなやかで強靱な優しさの絆を求めて、歩みを急ぎたい。